

作物名：水稲
 病害虫名：細菌性苗腐敗症
 もみ枯細菌病（病原：*Burkholderia glumae* 及び *B.gladiosi*）
 苗立枯細菌病（病原：*Burkholderia plantarii*）

1 被害の特徴と診断のポイント

(1) もみ枯細菌病（写真1）

- 出芽直後のごく早い時期に発病した苗では、白色の葉鞘が淡褐色～暗褐色になり枯死する。緑化期以降に発病した苗では、新葉基部が白色に退色、次第に暗褐色となり腐敗枯死する。
- 発生は坪枯れ状（写真3）となり、葉基部の褐変枯死した苗の中心部を手で引くと基部あるいは腐敗部から容易に抜ける。



写真1 もみ枯細菌病



写真2 苗立枯細菌病

(2) 苗立枯細菌病（写真2）

- 初期症状は、もみ枯細菌病と酷似しており識別は難しい。後期症状は、水不足でしおれたようになり、著しく赤茶けた状態で乾枯し、芯は腐敗せず抜けない。

2 伝染源・伝染方法

- いずれの病菌も、汚染種子が第一次伝染源となる。もみ枯細菌病菌は、被害籾やわらも伝染源となる。苗立枯細菌病菌は、池の周辺などに自生する多年生イネ科雑草の根部から検出されるので、そうした場所の湖沼水等も伝染源となりうる。

3 発病しやすい条件

- 罹病種子の使用（出穂期の気温が高く降雨が多いと籾感染が多くなる）
- 不適切な床土の pH（5.5 以上でもみ枯細菌病、5.0～5.5 より低いと苗立枯細菌病の発生を助長）
- 催芽、出芽時の高温、育苗中の高温多湿（30℃以上）
- 過度の厚播き

4 防除方法

(1) 耕種的防除

- 罹病苗を移植したほ場及び周辺ほ場からは採種しない。
- 塩水選により保菌籾を除去する（もみ枯細菌病）。
- 浸種を含め、育苗には清潔な水を使用する。
- 適正な pH の床土を使用し（pH5.0～5.5）、過度な厚播きを避ける。
- 催芽、出芽時や育苗中は 30℃以上にならないようにする。
- 床土は均平をとり、水分過多にならないようにする。特に排水不良や粘質な土壌は発生が多くなる傾向があるので使用しない。

(2) その他防除

- 種子消毒を行う（化学農薬、温湯浸漬法、生物農薬）。
- 薬剤耐性菌（オキシリニック酸剤耐性）が国内で確認されている。同一作用機構分類に属する剤の連用は避ける。
- 温湯浸漬法と生物農薬の体系処理は、それぞれの単独処理よりも防除効果が高まる。

5 出典

(1) 参考文献

- 宮城の稲作指導指針【基本編】（宮城県）
- 農業総覧 病害虫防除・資材編1（農文協）
- 植物防疫 第74巻第9号:38-44（日本植物防疫協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真3 苗腐敗症による坪枯れ

（令和5年9月改訂）